

Imke Harbers and Matthew C. Ingram(2020) " Mixed-Methods Designs " in Luigi Curini, Robert Franzese eds, *The Sage Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations*, Los Angeles, Sage, pp. 1117-1132.

Imke Harbers and Matthew C. Ingram (2020) 「混合手法の研究デザイン」 pp. 1117-1132.

➤ 紹介文

本稿は、政治学・国際関係論に関する定性的・定量的方法論を幅広くカバーした最新の著作、"SAGE Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations"に収められた論文である。混合手法の最新の研究動向が示されるとともに、その特徴及び課題について考察が行われている。

➤ 概要

- 混合手法研究とは、1990年代半ばに行われた社会科学の方法論争(E.g. KKV論争)を一因として爆発的な人気を獲得し、現在も多くの研究が活用している研究手法である
- 本稿は、近年関心が高まっている混合手法研究 (Mixed-methods Reserch ; 以下 MMR と称する) について、(1)定義、(2)学術分野での影響力の高まり、(3)MMR の分類の順に検討することで、政治学における MMR の研究動向とその特徴を明らかにする。上記の考察を踏まえて、MMR の課題と将来の発展の方向性を考察する。

➤ 混合手法研究とは何か (1118-1119 頁)

- 近年の MMR の人気の高まりを背景に、何が MMR で、何が MMR でないかについて活発な議論が行われている。
 - 本稿は MMR を定義する際に、Journal of Mixed Methods Research の創刊編集者による貢献を出発点とする。すなわち、MMR とは「研究者が単一の研究または調査プログラムにおいて、定性的・定量的アプローチや方法を用いてデータを収集・分析し、知見を統合し、推論する研究」(Tashakkori and Creswell 2007 : 4) を指す。
 - MMR は実証主義から解釈主義まで幅広い認識論的立場において採用される可能性がある。本稿では実証主義的研究における MMR の位置付けに対象を焦点化する。ここで実証主義的研究とは、因果的または記述的な「推論」を行う事を分析

目標とする研究群を指す。

- ◇ 本稿では、上記の「推論」という用語を「研究の焦点である概念や仮説についてより幅広い結論を導き出すためにデータを使用するプロセス」を意味するものとして使用する(Brady and Collier 2004: 291)。
 - ◇ 推論を目的とした研究に焦点化することで、定性的研究と定量的研究の両立について、存在論的・認識論的な理由から議論が錯綜することを回避することができる。
- MMR は以下の二つの方法論的特徴を有している。
 - 第一に、MMR は方法論的折衷主義である。すなわち、手法をうまく統合することで、研究課題に対する理解の総和がより大きくなるという信念である。
 - ◇ 「研究者は研究の相乗的(synergistic process)なプロセスを通じて研究課題を探究し、研究課題に答えるための他の方法を常に考慮している」(Teddlie and Tashakkori 2010: 16)。
 - 第二に、MMR は「反復的、循環的な研究アプローチ」(Teddlie and Tashakkori 2010: 17; Yom 2015)を採用する。
 - ◇ 研究過程を反復・循環的に理解することで、研究者は研究の実施過程において、帰納的段階と演繹的段階、探索的段階と確認的段階を交互に行き来することができる。このような反復に基づく調査は、調査をある特定の始点と終点を持つプロセスとして考えるのではなく、研究の各段階が次の段階に情報を与える可能性があるという信念によって動機づけられている。
 - MMR 研究者は方法論的折衷主義に傾倒しているが、MMR とは「何でもあり」の研究手法並びに姿勢ではない。MMR 研究者においてはその分析上の利点(analytic benefits)だけでなく、方法論上の課題を踏まえた議論が活発に行われている(この点は本論の最後に検討する)。

➤ 混合手法研究の台頭 (1119-1123 頁)

- MMR は 1990 年代半ば以降、社会科学や行動科学における広範な方法論争に後押しされて、爆発的な人気を獲得してきた。
 - 例えば、KKV の“Designing Social Inquiry” において提起された定量的研究と定性

的研究が一つの推論の論理を共有するという主張に対して、American Political Science Review において一連の著名なレビュー並びに反論がなされた(Caporaso 1995; Collier 1995; Laitin 1995; Rogowski 1995; Tarrow 1995)。上記の定量・定性的研究の対立は、Brady and Collier (2004) “Rethinking Social Inquiry”が、定量的研究と定性的研究では異なる推論の論理が存在すると主張したことで最高潮に達する。このような社会科学の方法論争を経て、最終的には定量的・定性的研究の相補性に焦点を当てた議論が行われた。

◇ 両研究の相補性に着目した代表的な書籍として、社会科学並びに行動科学分野の読者を対象とした Tashakkori and Teddlie (2003, 2010)と、Creswell and Clark (2007, 2011)がある。

◇ 政治学(political science)では、Seawright (2016)、Gerring (2017)、Goertz (2017)、Weller and Barnes (2014) の書籍が MMR の設計と実施についての基礎情報を提供している。

- MMR の活用は今日においても増加し続けており、MMR が一過性の流行ではなく今後も継続することが以下のデータによって示唆されている。
 - MMR に関する出版物の引用回数の上昇 (2019 年 1 月現在)
 - A. Tashakkori と C. Teddlie による(2003) “*Mixed Methodology: Combining Qualitative and Quantitative Approaches*”; (2010)“Overview of Contemporary Issues in Mixed Method Research”の両論文はこれまでに 11000 回以上引用されている。また、Creswell and Clark の(2007) *Designing and Conducting Mixed Methods Research*”; (2011) “*Designing and Conducting Mixed Methods Research*”の両書籍は 25000 回以上引用されている。
 - 新しい専門誌の出現

個々の論文や出版物だけではなく、いくつかの学会誌が MMR に関心を寄せている。その中でも、2007 年に創刊された Journal of Mixed Methods Research (JMMR) は、2010 年から 16 年までのインパクトファクター(掲載論文の被引用数から雑誌の影響力を示す指標)が 2.00 程度であったが、2017 年に 3.27、2018 年に 3.54 と上昇している。これにより、JMMR は 2017 年、2018 年ともに「社会科学-学際的 (SSCI)」のカテゴリーにおいて、約 100 誌の中からトップランクのジャーナルに選出された。

- ・ 研究者を中心とした組織化されたコミュニティの形成

政治学分野における MMR への関心の高まりから、アメリカ政治学会において「定性的・混合手法研究」のセクションが新設された。2003 年から発行されている当該セクションのニュースレターでは、セクションのメンバーが MMR の最新動向を紹介しており、幅広い読者を獲得している。

➤ **混合手法研究の種類 (1123-1126 頁)**

- MMR 研究は多岐にわたることから、その研究タイプについて活発な議論が行われており、多くの研究者が類型化を行なっている (Biesenbender and Héritier 2014; Morse 2010; Teddlie and Tashakkori 2009)。本節では、MMR の類型化の提案や、MMR を分類するための従来の取り組みを論じるのではなく、MMR を採用する際に研究者が考慮しなければならない、以下の三つの主要な次元を明らかにする。具体的に、①統合の度合い、②組み合わせの順序、③組み合わせの分析的動機である。

- ① 統合の度合い

統合の度合いとは、定量的手法と定性的手法の組み合わせ方を意味する。すなわち、それぞれの手法が同じデータ(data)や情報(information)をどの程度分析しているかということを含意する。本稿では統合の度合いについて、「並列」と「統合」の二つのパターンに区別する。

- 定量的・定性的手法が全く統合されていない研究デザインを、Domínguez and Hollstein (2014)に従い「並列」型研究デザインと呼ぶ。並列型研究デザインの基本的な考え方は、異なる手法が同じ結論をもたらすかどうかを確認することにある。定量的分析の結果が、定性的分析の結果と一致する場合、研究者は自身の研究結果に自信・確証を持つことができる。
- 定量的・定性的手法が高度に統合されている研究デザインを「統合」型研究デザインと呼ぶ。統合型研究デザインは、「入れ子デザイン (Lieberman 2005)」や「埋め込みデザイン (Hollstein 2014) とも呼ばれる。ここでは、一方の手法によって得られた知見を、他方の手法によって調査することで、研究結果の正当性が保証される (Seawright 2016)

- ② 組み合わせの順序

組み合わせの順序とは、手法を用いる際の時間的順序を指す。定性的な研究から始め、それを定量的な研究で補完することを主張する論者もいれば (Rohlfing 2008)、その順序を逆にすることを主張する研究者もいる (Lieberman 2005)。

- 順序の問題は、特に統合型研究デザインに関連している。そこでは定量的および定性的研究が段階的に行われることが特徴となっている。この一方で、並列型研究デザインでは順序はあまり重要ではない。後者では、定量的研究および定性的研究が独立して実施される。
 - 政治学では、特に回帰分析を代表とする定量的研究に事例研究などの定性的研究を補完するという傾向が特に顕著となっている。しかし、研究対象についてあまり知られていない場合や、データの利用可能性によって定量的分析の適用の機会が制限される場合は、事例研究（定性的研究）から始める方が良い場合がある。
 - MMR が研究の反復的なサイクルを重視していることを踏まえると、順序に関する議論は、定量的段階と定性的段階の間を行ったり来たりするという、より幅広い研究プロセスにおいて検討されるべきである。
- ③ 組み合わせの分析的動機

本稿冒頭で述べたように、推論とは「何が起こったかについての結論に達するためにデータを用いる」記述的推論と、「なぜある事象が起こったかについての結論に達するためにデータを用いる」因果的推論に区別ができる。

- MMR は上記の推論の枠組みにおいて、理論の検証 (testing)、理論の構築 (building)、概念形成 (concept formation)、測定 (measurement) に代表される分析的動機を有している (George and Bennett 2005; Lieberman 2005; Adcock and Collier 2001; Ahram 2013)。以下ではいくつかの研究をとりあげ、MMR の分析的動機を例示する。

◇ Lieberman (2005) は、推論を目的とする研究において、定量的手法と定性的手法を組み合わせた「入れ子分析」を採用している。入れ子分析では、定量的な調査と定性的分析を統合するために、統計分析に基づき事例を選択し、事例分析によって因果メカニズムに関する証拠を提供するという、両手法の組み合わせが明確に体系化されている。この種のデザインの分析的動機は、理論検証または理論構築のいずれかに基づいている。

◇ Jensenius (2014) は、定量的データの収集を目的としたフィールドワークにおいて、「暗黙的 (implicit)」に MMR を実施している。Jensenius は定量的手

法で分析するデータを収集するためにフィールドワークを行った。その後、フィールドワークを通じた事例に関する詳細な知識を得たことによって、定量的分析が洗練された。

- ◇ Steele (2017) の研究は、本稿が指摘した統合型研究デザインの一例であるとともに、研究の異なる段階が互いに積み重なっていくという、MMR の反復的な性質を示している。Steele は、市民の強制的な立ち退きを目的としたコロンビア武装勢力の暴力行為を理解するために、最初に綿密なフィールドワークを行った。その後、フィールドワークで得た知見と公文書などの定性的データを統合することで、武装集団の暴力行為を理解するための仮説を構築した。さらに、上記の仮説を検証するために、Steel は国内の他の地域における選挙結果や避難民に関する定量的データを収集した。
- ◇ Trejo & Ley (2018) の研究は、定量的研究と定性的研究の両段階が互いに語り合う統合型研究デザインの一例であり、定量的データと定性的データを利用した、より強固で説得力のある主張の構築方法を示している。両者はメキシコにおける大規模な犯罪暴力の起源を理解するために、殺人事件の地理的データを用いて暴力の発生パターンに関する図を作成した後、インタビュー調査を実施した。ここでは、暴力の発生場所や時期に関する主張が定量的に検証され、事例研究によってそれらのメカニズムが探求された。

➤ 混合手法研究に内在する課題とその克服 (1126-1128 頁)

これまでに MMR の特徴や手法上の認識利得を確認した。本節では、MMR が有するいくつかの課題と、研究者が方法論的・実践的にそれらに対処する方法について議論する。

- 定量的・定性的研究では、より高度で専門的な新しい技法が次々と生まれている。しかし、方法論的アプローチの高度化と複雑さを考えると、個々の研究者が複数の研究の伝統並びに最新のアプローチに熟達することは困難であると思われる。MMR は、研究者に異なる研究手法・伝統に精通するよう求めるが、それには、多くの努力と時間が必要であるとともに、研究資金の獲得や新しい研究コミュニティへの溶け込みが必要となる場合がある。このように、定量的・定性的方法の専門性を高めようとする個々の研究者にとっては、明確な障壁が存在する。
- MMR の研究者は上記の課題に対し、方法論の専門性によって仕事を分担するというコラボレーション（チームでの作業）を採用することで、二つ以上の手法に習熟するという課題に取り組んでいる。

- 定量的研究の結果に基づき事例選択を行う際、事例を適切に特定できないという問題が生じることがある。例えば、ある観察単位が時系列的に複数の観測値を提供している場合、統計分析で得られた仮説を事例研究によって検証するための単一の観測値を特定することが意味を持たない場合がある。
 - Giraudy (2015) と Ingram (2016a) は、時系列データやマルチレベル・階層データを用いた MMR の方法論的なガイダンスを提供している。
 - Domínguez and Hollstein(2014)や Ingram(2016) は、MM ネットワーク分析という、対象間の関係性を重視した新たなアプローチを提唱している¹。
 - ◇ Ingram (2016) は、メキシコの裁判官のネットワークにおける法思想の普及を調査する研究において、定量的段階でネットワークの影響力を特定し、その後、ネットワークにおける中心性(centrality)に基づいて個々の裁判官を研究対象として選択している²。Ingram はこれらの裁判官にインタビューを行い、特定の法的思想を有するまでに、裁判官らがネットワークの結びつきにどのような影響や意味を見出すかを評価している。
- 二つ以上の方法論を組み合わせる際に、あるアプローチに基づく推論を、他のアプローチに基づく推論と比較して、どちらをどの程度重視するかを決定することは困難である。
 - Humphreys & Jacobs (2015) は「定性的証拠が定量的分析の基礎となる仮定を更新し、その逆もありうる」ことを主張し、上記の課題に取り組んでいる (Humphreys and Jacobs 2015: 654)。両者は、主要な研究分野である選挙制度の起源と武力紛争の原因という二つの例を用いて当該アプローチを説明している。

➤ 結論

- 本稿は、MMR の定義を確認することから出発し、MMR がどのように発展してきたかについて、被引用数の上昇、新たな出版物、研究コミュニティの形成という観点から考察を行った。その上で、MMR を行う上での三つの原則を確認した。論文の後半では、MMR の課題を明らかにするとともに、それらに対する新たなアプローチと将来の方

¹ 「ネットワーク分析」とは、人間、企業、生物、人体、コンピューター等の対象を、「点と線からなるネットワークとして表現し、その構造的な特徴を探る研究方法」を指す。この分析手法は「社会学、人類学、心理学などの人文社会科学、またグラフ理論と呼ばれる数学とそれを応用した情報科学やオペレーションズ・リサーチなどの工学分野で発展」した(鈴木 2009 : v 頁)。

² 「中心性」とはネットワーク分析で用いられる指標の一つであり、「ネットワークの中で誰が中心的な存在であるか」を示す概念である。(安田 1997 : 3 頁)

向性を示した。

- 本稿が明らかにした点で最も重要なことは、研究者が考慮しなければならない原則・決定に従って、MMRの種類を分類したことにある。具体的には、(1) 手法の組み合わせ方（並列か統合）、(2) 手法の順序付け、(3) 組み合わせの分析的動機である。
- 本文で強調したように、MMRとは「何でもあり」の研究手法を意味するものではない。優れたMMR研究は、多様な方法をどのような順序で、どのような分析目的のために統合していくかによって構成される必要がある。

➤ **参考文献**

安田雪, 1997, 『ネットワーク分析：何が行為を決定するか』新曜社.

鈴木努, 2009, 『ネットワーク分析』共立出版.